

第50回大宅壮一ノンフィクション賞受賞!! 『八九六四 「天安門事件」は再び起きるか』 著 安田峰俊

昨日5月15日(水)、株式会社KADOKAWAより2018年5月18日(金)に発売いたしました、安田峰俊著『八九六四 (はちきゅうろくよん) 「天安門事件」は再び起きるか』が、第50回大宅壮一ノンフィクション賞(主催:公益財団法人日本文学振興会)を受賞いたしました。

<受賞コメント>

政治的には専制体制だが経済は大きく成長し、愛国主義プロパガンダで自国民をまとめ上げる……。そんな現代中国の姿は、六四天安門事件(八九六四)を出発点として生まれました。米中対立の深刻化と中国経済の停滞を迎え、中国の過去30年間の歩みが問われているいまこそ、天安門事件の意味を再び考え直す時期が来ているのかもしれない。そうした区切りの時期に、拙著が受賞したことを嬉しく思っています。——安田峰俊

なお、本書は2018年10月31日(水)、第5回城山三郎賞(主催:公益財団法人角川文化振興財団)を受賞、天安門事件から30年目となる本年(2019)、さらに注目を集めている作品です。

★大宅壮一ノンフィクション賞に関してはこちらから→ <http://www.bunshun.co.jp/shinkoukai/>

**現代中国最大のタブー、天安門事件に迫った大型ルポ!!
中国、香港、台湾、そして日本。60人以上を取材。
この取材は、今後もう出来ない——。**



【内容紹介】

台湾の民主化、東西ドイツの統一、ソ連崩壊の一つの要因ともされた天安門事件。毎年、六月四日前後の中国では治安警備が従来以上に強化され、スマホ決済の送金ですら「六四」「八九六四」元の金額指定が不可能になるほどだ。

あの時、中国全土で数百万人の若者が民主化の声をあげていた。世界史に刻まれた運動に携わっていた者、傍観していた者、そして生まれてもいなかった現代の若者は、いま「八九六四」をどう見るのか? 中国、香港、台湾、そして日本を巡り、地べたの労働者に社会の成功者、民主化運動の亡命者に当時のリーダーなど、60人以上を取材した大型ルポ。語り継ぐことを許されない歴史は忘れさられる。これは、天安門の最後の記録といえるだろう。

- “現代中国”で民主化に目覚めた者たち
 - タイに亡命し、逼塞する民主化活動家
 - 香港の本土（独立）派、民主派、親中派リーダー
 - 未だ諦めぬ、当時の有名リーダー
 - 社会の成功者として“現実”を選んだ者、未だ地べたから“希望”を描く者 etc.
- 語ってはならない事件を、彼らは語った!!

【各章の内容】

序章 君は八九六四を知っているか？

郭定京（仮名） 事件当時19歳、浪人生 取材当時41歳、書籍編集者
「八九六四」当時の所在地：中華人民共和国 北京市内
取材地：中華人民共和国 北京市 東城区の大衆食堂 取材日：2011年12月9日 他 etc.

第一章 ふたつの北京

張宝成 事件当時30歳、家具店経営者 取材当時55歳、無職・前科二犯
事件発生時の所在地：中華人民共和国 北京市内
取材地：中華人民共和国 北京市 某所 取材日：2015年4月5日 etc.

第二章 僕らの反抗と挫折

余明（仮名） 事件当時26歳、北京大学教員 取材当時52歳、旅行会社経営者
「八九六四」当時の所在地：中華人民共和国 北京市内
取材地：中華人民共和国 北京市東直門付近のスターバックス 取材日：2015年8月11日 etc.

第三章 持たざる者たち

姜野飛 事件当時21歳、自転車修理工 取材当時47歳、無職・難民申請中
「八九六四」当時の所在地：中華人民共和国 四川省成都市人民南路付近
取材地：タイ王国 バンコク市ヤワラート地区京華大旅社の喫茶室 取材日：2015年2月27日 etc.

第四章 生真面目な抵抗者

凌静思（仮名） 事件当時27歳、北京外国語大学夜間部大学生 取材当時53歳、司書
「八九六四」当時の所在地：中華人民共和国 北京市西城区
取材地：中華人民共和国 北京市某民間機関資料室 取材日：2015年8月 etc.

第五章 「天安門の都」の変質

雨傘革命の学生たち、天安門を追悼する民主派、香港独立を訴える本土派、冷笑する親中派。香港の変質を抉る。

第六章 馬上、少年過ぐ

王丹 事件当時20歳、北京大学歴史学部大学生・「民主サロン」組織者・北京高校学生自治联合会幹部
取材当時46歳、著述家・(台湾) 国立中正大学客員助教授

「八九六四」当時の所在地：中華人民共和国 北京市内
取材地：中華民国(台湾) 台北駅付近のカフェ 取材日：2015年9月 etc.

ウアルカイシ（吾爾開希、ウルケシュ・デレット）

事件当時21歳、北京師範大学教育学部大学生・北京高校学生自治联合会幹部

取材当時47歳、政治運動家・ビジネスマン 「八九六四」当時の所在地：中華人民共和国 北京市内
取材地：中華民国(台湾) 台中市内のホテル 取材日：2015年9月 etc.

終章 未来への夢が終わった先に /あとがき / 主要参考文献一覧

◆著者紹介 安田峰俊（やすだ みねとし）

1982年滋賀県生まれ。ルポライター。立命館大学人文科学研究所客員協力研究員。立命館大学文学部(東洋史学専攻)卒業後、広島大学大学院文学研究科修士課程修了。在学中、中国広東省の深圳大学に交換留学。一般企業勤務を経た後、著述業に。アジア、特に中華圏の社会・政治・文化事情について執筆を行っている。著書に『和僑』『移民 棄民 遺民』(角川文庫)、『さいはての中国』(小学館新書)、編訳書に『「暗黒・中国」からの脱出』(顔伯鈞、文春新書)など。18年本作で第5回城山三郎賞を受賞。 ※著者Twitterアカウント：@YS0118